

# 埋文にいがた

No. 71  
2010. 6. 30

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 平成22年度発掘調査遺跡の紹介

### しもわり 下割遺跡▽

(上越市米岡字番場780番地ほか)

高田平野中央部に位置する米岡集落の北～西方に広がる遺跡で、一般国道253号上越三和道路建設に伴い、平成14年度から断続的に4回の発掘調査を実施しています。今年度の調査区は、遺跡の東端に当たり、関川の支流である飯田川左岸の標高14.5m前後の自然堤防上に位置します。平面積2,550㎡を対象に8月まで調査を実施する予定です。現況は荒蕪地となっていますが、近年まで宅地として利用されてきました。

古代または中世の集落遺跡と予想されますが、地形的に高所に位置するため、近世以降の遺構も多く見つかっています。また当該地は、南北約70m、東西約60mの規模で、土塁や濠によりほぼ方形に囲まれており、中世の館のような景観を呈していました。このような土塁や濠で囲まれた屋敷地は、上越地域の関川右岸から東頸城丘陵麓にかけて多く認められ、「環濠屋敷」と呼称されています。集落の核として機能し、その成立時期は中世後期から近世と考えられています。今回の屋敷地の土塁と濠は、北側と西側が良好に残っており、土塁頂部と濠底面の比高差は1.7～2.0m程でした。また東側には鍵の手状の出入口が設けてありました。

現在までに見つかっている遺構は、掘立柱建物の柱穴・井戸・土坑・溝などですが、出土遺物が非常に少なく、構築時期を判別しがたい状況です。遺物は近世陶磁器・瓦器がきが最も多く、中世の珠洲焼・中世土師器・青磁、古代の須恵器・土師器が少量出土しています。土塁を断ち割って調査したところ、構築時期は近世以降であることが分かりました。今後その祖形となる中世の遺構群が見つかることが期待されます。

(石川智紀)



調査区近景(北東から)



東側の出入口(東から)



北側の土塁と濠の完掘状況(北西から)

## 整理報告遺跡

ながわり  
長割遺跡

(村上市下相川字長割307ほか)

本紙で3回(62・63・67)紹介した長割遺跡の続報です。整理作業で分かってきたことを報告します。コンテナ(54cm×34cm、深さ10cm)で約1,200箱、重さは約1.3tも出土した縄文時代後期前半(約3,700~3,800年前)の土器のうち、復元した1個の土器(下写真)に焦点を当てます。縄文土器では出土頻度が最も高い縦長・括れのないプロポーションで、簡素な文様が描かれたものです。展示されることが少ない地味な土器ですが、観察すると「どのように焼かれたか」、「どのように使われたか」が推測できます。

**どのように焼かれたか**：砂を混ぜた粘土で形作られ、「窯」のような密閉された空間ではなく、土器のまわりにタキギがおかれてオープンな状態で「野焼き」されたものです。野焼きされた土器には、マキから出たススがかくついた「黒斑」が残ります。黒斑は黒色~暗緑色をしていて洗ってもとれません。外面はススのためよく分かりませんが、内側は観察できます(写真1)。黒斑の形は縦に細長く、上から底部にかけて徐々に色が濃くなり、底面は片側半分だけ付いています。このような黒斑ができたのは、約45°傾いた体勢で焼き上がったためです。内側を良く焼くために刺し込まれた「マキ」が「オキ」となり、傾いていたので底面付近にたまってくすぶり続けたため、底面付近の黒斑の色が濃くなったものと推測されます。また、傾けたのは底の外側を良く焼くためと考えられます。

**どのように使われたか**：外面にススが、内面にはコゲがあるため、煮炊きに使われたことがわかります。専門用語では「深鉢形土器」ですが、使い方からは「深鍋」と呼ぶべきものです。高さは約40cmで、約20ℓも入ります。今の一般的な鍋に比べると、縦長で大きいことがわかります。スス・コゲをもっと観察すると、当時の煮炊きの方法・調理物の一部が推測できます。ススは底部付近にはなく(写真2)、逆にコゲは底部付近に付いているのが特徴です(写真3)。ススがない底部付近は強い炎でススが飛んだ(酸化消失した)ことを意味します。片側のススは口縁部付近まで付いていますが、その裏側は上までススがついていません。縄文人が主に片側からマキを焚いた結果かもしれません。外側で最も強い炎が受けた部分の内側がコゲているという点が重要です。コゲには不整形のもの(写真3のコゲ)と、ベルト状に全周するもの(写真3のコゲ)が観察できます。水を沸かしただけではコゲはつきません。形の特徴から、コゲは固形の食材、コゲはドロドロしたシチュー状のものが、それぞれコゲついたと推測されます。

報告した土器は形・文様とも地味ですが、類例が少ない希少品であると共に、当時の「暮らし」の推測に不可欠です。完全な形に復元された土器の黒斑、スス・コゲを是非、観察してみてください。(滝沢規朗)

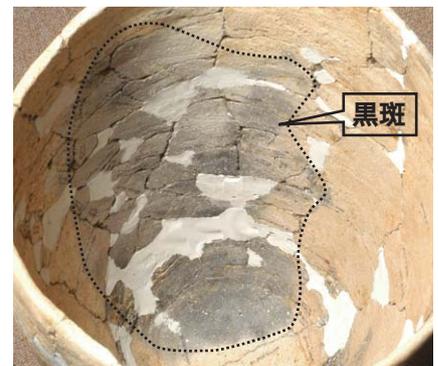


写真1 内側の黒斑



写真2 スス附着状況

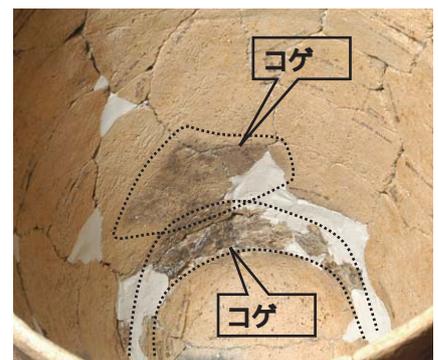


写真3 内側のコゲ

## 整理報告遺跡

ふる と ろ  
古 渡 路 遺 跡  
えびやしき  
(村上市古渡路字海老屋敷ほか)

日本海沿岸東北自動車道建設に伴う発掘調査を平成20・21年度に実施しました。調査によって、中世の集落と縄文時代の狩場であったことが判明しました。22年度は発掘調査報告書の作成を進めています。今回は、遺物を整理する中で注目されるものを紹介します。紹介するのは中世の出土品のうち、補修されたものや転用されたものです。

中世の出土品は非常に少ないですが、陶磁器類（珠洲焼など）のほか、木製品、石製品（砥石・硯など）、金属製品があります。陶磁器類は一部13世紀代のものがありますが、おおむね14世紀初め～15世紀代のものです。

補修の痕跡は珠洲焼の壺（写真右上）・播鉢（同下左）、越前焼の甕（同中）、硯（同下中央）、砥石（同下右）などに認められます。補修には接着剤として漆が使われています。

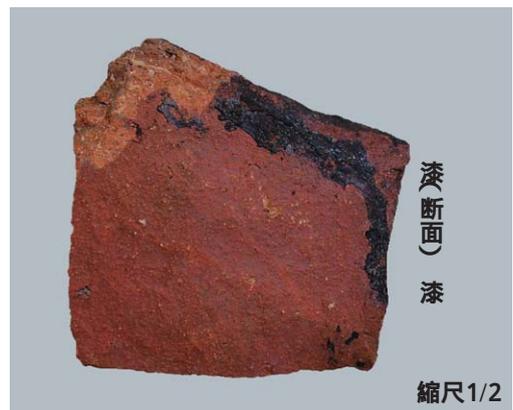
珠洲焼の壺は、中央の黒い帯が漆で接れているところです。越前焼の甕の割れ口にも漆が付着しているものがあります。破損品を修理して使い続けたものの、再び同じ所で破損してしまい、廃棄したのでしょうか。

硯も縁の欠けた部分に漆が残っています。砥石は石材や厚みの均一さが硯と共通するので、硯の破損品が転用されたものと考えられます。このほか珠洲焼の播鉢の破片も砥石（ヤスリ）に転用されています。珠洲焼は表面のざらつきが適していたようです。転用された硯・播鉢とも漆で補修されていますが、これらは転用前のことです。転用後の砥石端部に漆のはみ出しがないこと、砥面の漆にも砥跡が残ることからそれが推測されます。ここから、道具が壊れても一度は修理して使い続け、再び壊れても、次は素材の特徴を活かして別の道具へと生まれ変わらせていたことが分かります。補修や転用の痕跡から、当時の人のものを大切に作る姿勢と、最後までものを使い切る知恵や工夫が伝わってきます。（土橋由理子）



珠洲焼の壺

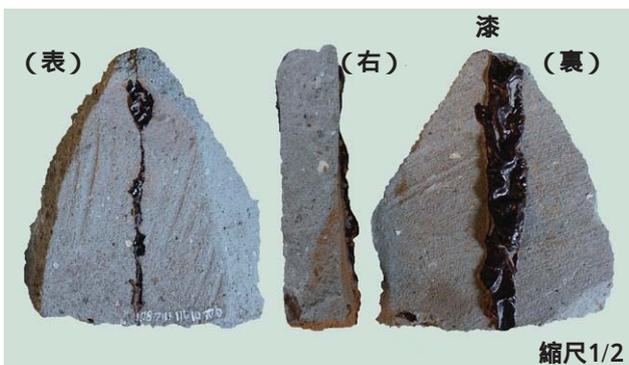
縮尺約1/4



越前焼の甕の破片

漆断面  
漆

縮尺1/2



砥石(ヤスリ)に転用した珠洲焼播鉢の破片

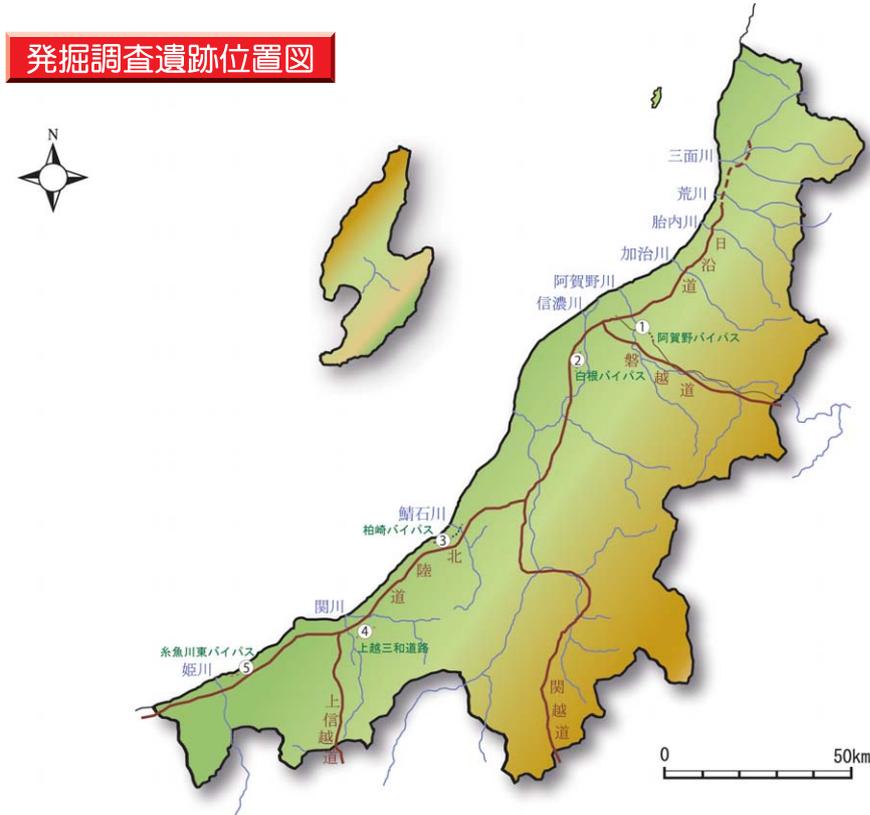
縮尺1/2



硯(左)と転用砥石(右)

縮尺1/2

## 平成22年度発掘調査遺跡・整理作業・試掘確認予定一覧



### 本発掘調査

番号	遺跡名	事業名	所在地	調査期間	主な時代
1	やまくち 山口遺跡Ⅱ	阿賀野BP	阿賀野市	4～9月	古代・中世
2	こきかいづけ 小坂居付遺跡Ⅱ	白根BP	新潟市	4～8月	中世
3	ちごつひ 千古作遺跡Ⅱ	柏崎BP	柏崎市	8～11月	中世
4	しもわり 下割遺跡Ⅴ	上越三和道路	上越市	4～8月	中世
5	ろくたんだみなみ 六反田南遺跡Ⅴ	糸魚川東BP	糸魚川市	4～11月	古墳・縄文

### 試掘確認調査

番号	地区名	所在地
1	北陸道栄SIC	三条市
2	7号新発田拡幅	新発田市
3	49号阿賀野BP	阿賀野市
4	7号逢谷地IC	新潟市
5	49号姥ヶ山IC改良	
6	8号白根BP	柏崎市
7	8号柏崎BP	
8	17号六日町BP	南魚沼市
9	17号浦佐BP	
10	8号青海跨線橋	糸魚川市

### 整理作業

番号	遺跡名	所在地	主な時代
1	ながわり 長割遺跡	村上市	縄文
2	ふるとろ 古渡路遺跡		縄文・中世
3	むらまえひがし 村前東A・B遺跡	阿賀野市	古代・中世
4	やまきし 山岸遺跡	糸魚川市	古代・中世
5	ろくたんだみなみ 六反田南遺跡Ⅳ		縄文
6	ひめこぜ 姫御前遺跡Ⅱ		古墳
7	たけはな 竹花遺跡Ⅰ・Ⅱ		古墳・中世
8	すざわかくち 須沢角地遺跡	南魚沼市	古代
9	かわくほ 川久保遺跡		縄文

## 埋文インフォメーション

## 第17回遺跡発掘調査報告会のお知らせ



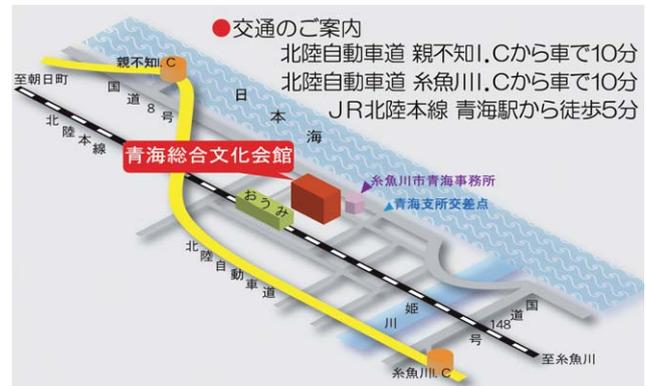
第17回遺跡発掘調査報告会を下記により開催します。糸魚川市での開催となる今回は、糸魚川市内のこれまでの遺跡調査の歩みや、当事業団が平成16年度から同市内で行ってきた北陸新幹線・国道バイパス事業の発掘調査の総まとめのほか、近年の最新の調査内容をスライドを使って分かりやすく報告します。また、報告会で紹介する遺跡の出土品も併せて展示します。皆様のご来場を心からお待ちしております。

期 日 平成22年9月5日(日)

会 場 青海総合文化会館 きらら青海

(糸魚川市青海4657-3)

(駐車場251台 / JR青海駅から徒歩5分)



## 日 程

9:00 ~ 開場

10:00 開会

10:25 ~ 11:20 講演「奴奈川の遺跡～糸魚川市内における発掘調査の成果と課題～」

糸魚川市教育委員会文化振興課 木島 勉 係長

11:20 ~ 12:15 北陸新幹線・国道バイパス事業関係発掘調査のまとめ

当事業団 高橋保雄 課長代理

12:15 ~ 15:30 休憩(この間に報告者による展示説明会を行います)

13:30 ~ 15:30 遺跡発掘調査報告(六反田南、南押上遺跡、姫御前・竹花遺跡、山岸遺跡)各遺跡調査担当者

15:35 閉会

出土品展示は9月3日(金)から9月29日(水)まで青海総合文化会館 きらら青海 1階のギャラリーで行っております。ぜひ、ご覧下さい。

## 埋蔵文化財センター展示替えのお知らせ

当事業団が平成21年度に発掘調査した遺跡の出土品を下記のとおり展示しています。今回は、当センターの近隣に所在する、弥生時代の高地性環濠集落・古津八幡山遺跡(国指定史跡)の出土品展示も同時に行っています。遺跡散策と併せてぜひお立ち寄りください。



期間	遺跡名	所在地	時代・遺跡のトピックス
4 ～ 9 月	古津八幡山遺跡	新潟市	弥生時代後期:「倭国大乱」のころの高地性環濠集落(3月まで展示)
	長割遺跡	村上市	縄文時代中・後期:大型掘立柱建物を持つ大規模なムラ
	山口遺跡	阿賀野市	弥生時代前～中期:県内で調査例の少ない当該期の集落
	荒町南新田遺跡	上越市	飛鳥時代・中世:小河川(自然流路)の変遷と集落の変化
10 ～ 3 月	六反田南遺跡	糸魚川市	縄文時代中期:類例が少ない低湿地の当該期集落
	下新保高田遺跡	村上市	古墳時代前期:県内最大級の竪穴住居を持つ集落
	山岸遺跡	糸魚川市	中世:鎌倉時代の名族「名越氏」に関連する館跡

## 県内の遺跡・遺物69

いからし  
五十嵐館跡(昭和48年県指定)

(三條市飯田字館ノ前)

五十嵐館跡は、三條市東部(旧下田村)を流れる五十嵐川によって形成された、標高38mの沖積微高地に立地しています。昭和47年・50年の2回にわたり発掘調査が行われ、周囲に幅約10m、深さ約1mの堀を巡らせた不整形(台形に近い形)の館跡であることが明らかになりました。堀の内側には、下幅約6~10m、高さ約3mの土塁が巡っていたと推定され、東面と南面の角には礎石を用いた一間四方の小屋(櫓)があったようです。郭内(土塁に囲まれた範囲)は東西約50m、南北約60mで、約8,400㎡の広さを有し、掘立柱建物の一部と思われる柱穴列のほか、性格は分かりませんが、川原石を敷き詰めた石敷も見つかっています。館への出入口は東側にあり、「コ」字状に張り出す虎口の形態を持ち、門の痕跡も見つかっています。また、調査では、青磁・白磁・珠洲焼・瀬戸焼・常滑焼・かわらけなどの陶磁器類のほか、鉄製品(鋏・釘・鋸)・木製品(漆器の椀や箸、板など)・古銭など、鎌倉時代から江戸時代までの遺物が出土しており、長期間にわたって館が存続していたことを物語っています。

館の主は「五十嵐党」ともよばれた在地武士一族で、惣領(一族の長)は代々「小文治(小豊治・小文四)」を名のり、鎌倉幕府にも御家人として仕えていたことが「吾妻鏡」等の古文書で確認できます。その後、室町時代には段銭(税金)の徴収にも関わるなど、独立した在地領主としての地位を確保していましたが、戦国期の長尾氏(後の上杉氏)の時代になって、衰退・滅亡したと推定されます。館の正確な終焉の時期は定かではありませんが、五十嵐氏以降、上杉氏・堀氏と支配領主が代わり、江戸初期には廃絶されたと考えられます。

五十嵐氏の祖である小文治吉辰は吉ヶ平の雨生ヶ池に棲む竜神の子と伝えられ、源頼朝に仕え、関東・北陸方面に広く勇名を轟かせた豪傑であるとともに、養蚕などの農業技術の普及に尽力した人物として、地元語り継がれています。現在、館跡は公園整備され、地元の方々の憩いの場として親しまれています。



五十嵐館跡(南から) 三條市教育委員会提供



館東側の門跡・堀・土塁[植え込みのある場所] (北東から)

埋文にいがたNo 71

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地1  
TEL (0250) 25-3981  
FAX (0250) 25-3986  
e-mail: niigata@maibun.net  
URL: http://www.maibun.net  
印刷 阿部印刷株式会社